

『大谷本願寺通紀』に見る時宗教団

Jishū School as Seen in the Otani Hongwan-ji Temple Record

古賀 克彦 (KOGA Katuhiko)

〈キーワード〉一遍、時宗、玄智、大谷本願寺通紀

序 はじめに

近世江戸時代の本願寺並びに真宗本願寺教団の史的状況を記す『大谷本願寺通紀』中に、一遍と時宗(を含む他宗)教団に関する記述が少なからずある。だが、その事に詳細に触れた先行研究は、管見の限り無い。⁽¹⁾そこで、以下に『大谷本願寺通紀』の該当箇所を挙げ、多少の考察を加えようと思う。

一 『大谷本願寺通紀』の書誌

近世江戸時代の本願寺派学僧、京都西六条慶証寺玄智景耀著『大谷本願寺通紀』は、新編真宗全書刊行会「編」『新編真宗全書』史伝編六（思文閣、一九七六年）の「著者内容」に、

宗祖親鸞から第十七世法如にいたる史実を編年体に纂集したのを初めとして、宗家出身の諸師・宗祖の門弟・近世の学侶、本山並に大谷廟堂や諸別院の殿堂・沿革、本山の重宝や公私文書、法事の諸式、諸規則や僧階位次、その他真宗諸派や法然門下の浄土諸流、さらに広く仏教各宗綱紀の概要その他を記述して、本願寺の地位を明らかにしている（この中諸山綱要は、その全文もと大徳寺の僧某の著述で、当時世に流布していたものを収めたところである）。かくて天明五年八月ごろ一往稿を了えたようで、同七年九月歴世宗主伝と傍附諸伝とを刊行している。しかし著者はその後もしばしば改訂を加えることが多かった。（二―三頁）とあるように、本願寺、真宗諸派、法然門下の浄土諸流、仏教各宗の概要を記述している。

細川行信「編」『真宗史料集成』八卷「寺誌 遺跡」（同朋舎、一九七四年）に載る「大谷本願寺通紀」も同書「解題」に、

史料集成には、天明五年（一七八五）五月二十六日始筆し、同年十一月十五日に脱藁（巻末識語）した真宗全書所収本を用いることとした。

とあり、また、同書は「天明八年（一七八八）正月の大火にあい、版木の大半を焼失してしまった。」とする。更に、

第十四卷は「諸山綱略」として、ひろく仏教各宗の大綱を集録したもので、目次に示すごとく「扶桑二十

一本寺」と「寺社府諸宗分位」および「諸宗御門跡」について記述するが、このうち大半を占める諸山の概要は、玄智が識語に述べる通り『扶桑二十一本寺略伝』（「扶桑伽藍紀要」ともいい、大徳禪寺編）によるものであり、その二十一本山は（中略）清浄光寺（中略）である。（以上、二二〇―二九頁）

としている。この「扶桑伽藍紀要」を復刻した『注扶桑伽藍紀要』は国立国会図書館がデジタル資料化しており、居ながらにして閲覧ができるのだが、それによると当書冒頭に「京都 大徳禪寺編／東京 田島象二標注」とあり、掉尾の「扶桑伽藍紀要跋」を掲げる。闕字も其儘にしてある（以下、返り点等は省略し、〓は改行を示す）。

搏桑伽藍紀要者。録我 國二十一本寺之梗概矣。紀事約而不漏其要。元禄癸未之冬社釋海印示余曰。茲書之作出於大徳禪寺。而未行梓焉。是檢 搏桑諸派之本寺之捷徑也。乃命侍史謄寫以加再讐。今湛袿襟成冊収尊徑閣中云。

時／正徳二年壬辰正月／沙門梅軒

明治十六年十一月十七日出版御届／同十七年十月十日出版標注兼出版人 東京府平民／田島象二／神田五軒町二十番地

「元禄癸未」は元禄辛未〓四年（一六九二）か元禄癸酉〓六年（一六九三）か、正徳二年（一七二二）は確かに壬辰である。

本稿では『真宗史料集成』を引用する。

二 『大谷本願寺通紀』の本文抽出記事

では、まず以下に『大谷本願寺通紀』中の一編・時宗寺院関係語句が含まれる項目を抽出してみよう。併せて行論の都合上、大念仏宗・真盛派の項目も挙げる。『大谷本願寺通紀』の引用に関してのみ、二字下げは行っていない。

(※以下、関連項目は太字で表記し、返り点等は省略する。掲載にあたりレイアウトも適宜変更する)

大谷本願寺通紀卷第三

歴世宗主伝第三

第十二宗主准如、諱光昭、顕宗主第四子、母細川氏、(中略)

慶長三年(中略)八月(中略)(是月十八日、太閤豊臣秀吉公、薨伏見城^{諡曰豊臣大明神} 明年嗣子秀頼公^{至右大臣} 於豊国桜

馬場、營千僧供養堂、毎年四月八月、各扨十八日修仏事、聖護院道澄主会、請八宗僧各百口設齋、宗主亦率百

僧詣会、宗徒始著七条法服、有唱梵・登壇・誦偈・称仏・廻向式、例月唯限一宗百僧、輪番修之、吾宗或常築

寺^准 顯証寺^源 等為導師(八宗次序從開宗先後、謂台・密・律・禪・浄土・日蓮・時宗・真宗・次第、台密

角争、更互為首真宗、素居第六、自請在最後、臨時堂司二十余人、掃清堂内、施設壇場、視之諸宗、頗為殊

遇、時東門乞兩門輪番詣会、公府以唯限本寺不聽、仏光寺又乞由一派本寺詣会、以須從本願寺而詣亦不成○此

会至慶長十九年八月十八日而罷、世称大仏供養法事是也)(以下略)

(以上、『真宗史料集成』八、三八〇～三八一頁)

大谷本願寺通紀卷第六

旁門略伝

【東本願寺】(中略)

祖墳 寛文十年庚戌春、於祇園東南、長樂寺側、買鎮徒(以下略)

(以上、『真宗史料集成』八、四三一頁)

大谷本願寺通紀卷第九

(中略)

賜寺地、移市姬金光寺寺市屋道場 鴨川西畔、以広其基、(以下略)

(以上、『真宗史料集成』八、四九四頁)

大谷本願寺通紀卷第十四

諸山綱略目次

扶桑二十一本寺附僧綱弁

東大寺 興福寺 招提寺 西大寺 延曆寺／護国寺 園城寺 南禪寺 大德寺 妙心寺

泉涌寺 大谷寺 光明寺 本願寺 東本願寺／仏光寺 專修寺 清浄光寺 永平寺 久遠寺／万福寺

寺社府諸宗分位

三論宗 法相宗 俱舍宗 成実宗 律宗／華嚴宗 天台宗 真言宗 浄土宗 臨濟宗

曹洞宗 浄土真宗 大念仏宗 時宗 日蓮宗／黄檗宗

(中略)

諸山綱略緒余及此、例如
歴史有異域列伝

扶桑二十一本寺（中略）

京東大谷寺 統淨土宗鎮西派（中略）

又源空下有長樂・九品・二派隆覺皆空、丸山長樂寺祖（以下略）（以下略）

（以上、『真宗史料集成』八、五六二頁）

相州清淨光寺 淨土宗別立一家、或曰時宗

西山派善慧法孫智心、号一遍上人智心受業聖達、聖達受業善慧 智心弟子真教、称他阿弥陀仏、世曰遊行上人、真教創寺於藤沢、

号清淨光寺、洛七条金光寺亦爾 他阿以來、將住此寺者、必遍歷諸州、勸人念仏、世世住持、号遊行上人他阿弥陀仏、及

当住下世、而還寺住持、遊行具曰遊行一遍、当住及遊行上人、共著紫服、自東照宮握国柄、遊行到处乘伝、公

賜馬五十疋、役夫五十人為定或曰、第十二世他阿尊親、為大塔宮門流有四条派阿、住京四条金蓮寺 市屋派智心弟子俊晴作阿、京七条市中山金光寺開祖 奥谷

派智心弟子心阿伊子、奥谷実厳寺開祖 当麻派後他阿弟子内阿、相後他阿弟子解阿、常後他阿四世弟子弥阿榮 等（以下略）

（以上、『真宗史料集成』八、五六二頁）

附 僧綱弁

（中略）又承安以來、吉水源空、唱淨土宗、本出延曆、親鸞・日蓮・遊行_之教、相次而興、並不出延曆之下、

（中略）蓋至德之世、招提・西大・泉涌・三律寺、源空・親鸞・日蓮・遊行・四門徒、其道隆盛、枝院如林、

充滿諸州、由此其教各立、不由五本寺令、（中略）永祿二年、本願寺為御門跡、任大僧正、從爾仏光・專修・

相次為御門跡、与本寺鼎立、慶長七年、創東本願、（中略）而鎮西以知恩院為本寺、西山以光明為本寺、日蓮

教以久遠為本寺、遊行教以清淨「光略力」為本寺、於是合為二十一本寺、曰（中略）兩本願・仏光・專修・四

御門跡、知恩・光明・久遠・清淨「光略力」・四精舎也、（中略）親鸞・日蓮・遊行・三教、為扶桑三新道也、

惟仏法雖分諸宗、(中略)

右扶桑二十一本寺略伝一卷、於錦華殿、借宝曆癸未九月玉峰周珏所写本而書之、原本多写誤、間有疎漏、因修治之、読者須知

天明四年甲辰十月

釈玄智景耀識

(中略)

融通大念仏宗

天治二年四月四日、洛北大原山良忍天台良賢弟子、黒谷睿空之嗣、大原来迎院開基、感鞍馬毘沙門天勸諭、弘融通念仏之行回我所稱、融会衆人、衆人之唱、又通于我、衆人無不、功亦無不

畿内之人、徐信服之、而門人在嵯峨清凉寺、建立自義、不合宗意、故稍廢矣、元亨元年十一月十六日一作康永元年四月

僧法明撰州深日、江邑人、感八幡神託、而領良忍所施于男山之経像等、重弘斯宗、以為中興之祖、法明滅後、門人於諸

処、各立宗派、營精舎、所謂撰州住吉郡平野莊野堂、融通大念仏寺号大原山諸院、念院、西成郡浜邑源光寺、河内茨田郡梶

邑来迎寺号紫雲山聖衆院、法明弟子西願誠阿建之、等、是也、元禄年中、大念仏寺第四十六世大通以来、勅許紫衣法服、来迎寺亦著紫衣

三才図会七十四左七十五二十六左

或云、平野依准天台、其余依準浄土、又法明寺近来不属平野、寛政元年五月、河内佐太来迎寺慈空、承光住

慈雲異計、依倣真宗、密授口伝、誘惑真宗徒多年、至此事覺、浪華憲司謫罰遠島

案忍公唯弘融通之化耳、其開別宗者、自法明始、猶了源創仏光寺、而功帰宗祖也

元文四年寺社府分宗簿原本和様、改為漢文、政府之書、亦足備考

諸宗伝来 (中略)

大念仏宗 崇徳院大治二年、大原来迎院良忍、創融通念仏、自浄土門分出、今流於撰州等開宗至此、五十七年余

時宗 後宇多院建治年中、一遍藤沢遊行寺開基

弘興此宗、自淨土門分出、今行于世開宗年時未詳凡四百六十年余

真盛派天台宗異派 後土御門院文明十八年、江州山門坂下西教寺真盛、開灌頂修常念仏、遂盛一家、今流于伊賀・伊

勢・越前・等開宗此、三百二十六 (中略)

以上十六宗

○斯記班列諸宗、都以開宗前後定位、則大念仏宜在淨土之先、而置之真宗之後、又日蓮宗宜在時宗之次、而置之真盛之後者、此与余例違、今案、先列八宗、次拳淨土・禪、以結十宗之數、如大念仏、淨土支派、且門戶微小、不足以加十宗之列、而置之淨土之先、則有妨于結十宗之數、又真宗与淨土同家、且法化繁盛、宜接十宗、故置大念仏於真宗之後也、真盛派弘念仏、類同時宗、故置之時宗之次、而以日蓮宗置于真盛之後耳、

(以上、『真宗史料集成』八、五六四～五六七頁)

大谷本願寺通紀卷第十五

吉水門下支流

吉水滅後、法流分五、一大谷、二西山、三鎮西、四長樂寺、五九品寺

初大谷派 (中略) 元禄七年鎮西門下撰州生玉沙門松譽敬的造興御書直解六卷、印布于世、第二八左揭吉水宗派圖、一聖光、二善慧、三善心、四隆寬、五長西、指善心所伝、称大谷流儀等

二西山派、善慧証空所弘、(中略) ○又証空弟子性達下有智心、号一遍、智心下有真教、号他阿弥陀仏、世称遊行上人、為時宗開祖

(中略)

四長樂寺流、隆寬皆空居洛東長樂寺総門内弘化、故称其流曰長樂寺義隆寬弟子知慶亦創鎌倉長樂寺

(以下略)

(以上、『真宗史料集成』八、五六九頁)

自余諸流 淨土三国仏祖伝集下右七 列諸義云、渡野辺成覚坊立一念義、長樂寺隆寛律師立多念義、聖覚法印立説法義、薩生法眼立三昧義今世三昧聖是也又名御坊聖、高野山明遍僧都立道心義今世高野聖是也、東大寺俊乘坊立勸進義今世十歳聖是也、三井寺、公胤僧正立選択義、小坂親鸞法橋立一向義今世一向衆是也、九品坊覚明法印立九品義、法蓮信空阿闍梨立諸行義、密教加行本願坊立本願義、悟阿弥陀仏立一心義、覚阿弥陀仏立西方義、往生院念仏坊立他力義、其後一遍坊、他阿弥陀仏立遊行義今世時衆是也、如是私流義、高祖上人在世滅後一百余歳之間甚多云云、雖所叙雜駁、亦可以備考、蓮宗主言西山・鎮西・九品・長樂寺之外衆アマタニワカレケリト衆是也、蓋指此類耳

因縁、先西山後鎮西者、約証空・弁阿・入室次序、先長樂後九品者、約法義親疏、然蓮師云云者、唯從先短後長言便耳、本朝僧伝亦有西鎮先後之説与今違

(中略)

長樂寺派

長樂寺 在洛東祇園祠東丸山南、宇多帝勅願所、或云、桓武帝延曆年中伝教大師建之、近古廢壞之後、一遍弟一編為証孫、靈山国阿、中興為時宗、本尊安十一面觀音、寺領八石四斗、隆寛嘗在当寺総門内某坊疑是來迎坊、弘化、故呼其流称長樂寺義、非隆寛主斯寺也

伝当寺境地古時稍広、総門在今高台寺北面門辺、敬重絵五曰、長樂寺慈信真弟禪日房良海時、累代遺跡属我祖廟敷地之域、敬日・慈信・阿碩徳書籍付之尊老寛如云云、一期記上云、正安元年買副大谷南敷地、隆寛弟子慈信旧迹、真弟良海相伝居之、雖無沽志懇望買得云云、考此等文、隆寛所居今知恩院三門北、而当时尚在長樂寺総門内、隆寛・敬日・慈信・禪日、四世居之歟、或大谷寄地、此慈信旧跡、不関于隆寛歟、姑俟後考

(以上、『真宗史料集成』八、五七三頁)

吉水門下諸弟略伝

(中略)

○隆寛 又称皆空、或号無我、姓藤原氏、少納言資隆第三男也、初為範源嗣法、列慈鎮門下研学天台、慧解優深、官至權律師、後歸吉水受淨教要義、始致講説、居洛東長樂寺総門内某坊テ最後ノ別時念仏ラツトメラル、來迎房即所居之処乎故指所弘道称長樂寺義、安貞元年七月由來山徒誣告謫于奥州、相州森西阿潜以門弟実成代之、置隆寛於飯山在相州私宅、而敬重之、是年十二月十三日化、年八十、所著有顯選択一念多念分別事・羈中吟・等、具家属、有三子、長曰聖尊、次曰聖增、季曰慈胤

十卷伝言隆寛所造鈔物凡一百余卷、尊号真像銘文作四明山權律師劉官、或云、隆寛歿于謫所不復僧儀、因避官制故書通音字耳

(以上、『真宗史料集成』八、五七四頁)

西山胤裔 証空直弟合二十人(中略)

○性達 肥前藤津郡八本木村原山知恩寺開山 弟子有童聖・智心・号一遍 正応三年八月二十三日化

(中略) 智心下有一阿・真教・号他阿世称遊行上人 洛七条金光寺 相州藤沢無量寺開山 元応元年正月二十八日化

真觀・号淨阿 居洛東祇陀林寺朝廷賜金蓮寺 曆応四年六月二日化 称四条派時宗

作阿・名俊晴 洛金光寺開祖 世称市磨派

心阿・伊予奥谷実嚴寺開祖世称奥谷派

五人、真教下有他阿号中他阿弥陀 加賀井我入道 阿下

又有他阿号後阿弥陀 心通世 居洛東靈山正法寺等

後陀阿下有内阿・相州当麻無量光寺開祖 世称当麻派

解阿・常州海老島新善光寺開祖 世称解意派

王阿・京五条新善光寺開祖 世称御影堂開祖

沢阿・四人、沢阿

下有国阿・名随心 号真空 文和四年宛 心通世 居洛東靈山正法寺等

国阿下有宣阿・居洛東長樂寺

光英、英下有弥阿号榮尊 洛六条歡喜寺開祖 世称六条派

(中略)

〔真宗史料集成〕八、五八一頁)

天明五年乙巳五月二十六日染毫、十一月十五日晝寅／時脱藁

京師慶証寺玄智景耀 謹識

大谷本願寺通紀卷第十五 大尾

(以上、『真宗史料集成』八、五八四頁)

三 記事の内容考察

以上を大きく分類すると

- 1 歴史的叙述の中で時宗教団に言及した記事（第三）
- 2 本願寺の還京により、移転を余儀なくされた時宗寺院に関する記事（第九）
- 3 法然門下の隆寛が立てた長楽寺（現時宗寺院）及び長楽寺流に関する記事（第六・十四・十五）
- 4 時宗教団に関する記事（第十四・十五）である。

1の、所謂「千僧供養」に関しては、紙幅の都合により別稿を予定している。

2については、今井雅晴『編』『一遍辞典』（東京堂出版、一九八九年）の林讓項目執筆「市屋派」に、
天正十九年（一五九二）本願寺の京都進出に伴い、豊臣秀吉の政策により市姫社とともに鴨川西畔の現在地に移転したが（『大谷本願寺通記』（以下略。同書三七〜三八頁）とある。

3の中には、第十五に「長楽寺派／長楽寺（中略）一遍孫弟<sup>一遍為証
空法孫</sup> 靈山国阿、中興為時宗」との記述もある。「一遍孫弟」の範囲が曖昧ではあるが。

さて、ここでは特に4について採り挙げたい。再度記せば、第十四で

相州清浄光寺 浄土宗 別立一家、或曰時宗

西山派善慧法孫智心、号一遍上人

智心受業聖達
聖達受業善慧

智心弟子真教、称他阿弥陀仏、世曰遊行上人、真教創寺於藤沢、

号清浄光寺、

浴七条金
光寺亦爾

他阿以來、將住此寺者、必遍歷諸州、勸人念仏、世世住持、号遊行上人他阿彌陀仏、及

当住下世、而還寺住持、遊行具曰遊行一遍、当住及遊行上人、共著紫服、自東照宮握國柄、遊行到处乘伝、公

賜馬五十疋、役夫五十人為定

或曰、第十二世他阿尊觀、為大塔
宮護良親王之子、自爾賜御門跡之号

門流有四条派

阿智心弟子真觀淨
住京四条金蓮寺

市屋派

智心弟子心阿伊
子奥谷実敬寺開祖

当麻派

後他阿弟子内阿、相
宮護良親王之子、自爾賜御門跡之号

解意派

後他阿弟子解阿、常
州海老島新善光寺開祖

等（以下略）

（以上、『真宗史料集成』八、五六二頁）

とある。この箇所、先の『注扶桑伽藍紀要』では、こうある。傍線ママである。

○相州藤清浄光寺

淨土別立一
家或曰時宗

正中元年。遊行之徒他阿彌陀佛、某所創。他阿以來將住此寺者必遍歴諸州勸人念仏。世々住持號遊行

上人一人他阿彌陀佛。及當住下世。彼遊行上人、歸住遊行其曰遊行一遍。本名智心、始弘踊

躍念佛之法。智心受業於石山性達。達西山善慧之徒也。或曰清浄光寺十二世住持。他阿彌陀佛尊觀

大塔宮護良親王之子。以故自爾賜御門跡之號。至今當住泊彼遊行上人共著紫服。自東照君握國柄。彼

遊行上人到處乘傳。其公賜乃馬五十疋役夫五十員也。

文字の異同を見れば、「遊行具曰遊行一遍」と「遊行其曰遊行一遍」、「当住及遊行上人、共著紫服」と「當住

泊彼遊行上人共著紫服」であり、後者の泊は「オヨブ」と訓ずるので同義である。

智真は「智心」と両者とも表記され、聖達は後者及び次の第十五でも「性達」である。「石山」とあるのは

「原山」か。

前者には「真教創寺於藤沢、号清浄光寺」とあるが、これは誤りである。

尊観は大塔宮護良の子とあるが、現在では常盤井恒明の子とする（前出『一遍辞典』一九二―五頁。但し、尊観

の項目中に重複記述あり）。村井康彦・大山喬平「編」『長楽寺蔵七条道場金光寺文書の研究』（法藏館、二〇一二

年)の史料編所収「二四 普光上人(遊行三十二代他阿)書状(続紙)」に、

一、十二代上人、其方よりの系図無相違候、大堂宮よりの系図ハ、始而聞候、後西^{醍醐}西^{醍醐}ノ御影、相承ノ文書三通候、其内ニ依有由緒、遊行十二代上人へ令渡之者也トアリ、明鏡にて候、後西^{醍醐}西^{醍醐}ト十二代上人ハ御いとこにて候間、ソレモユカリハ不通候、位之程少シハ劣り之様ニ候へ共、三通之文書顕然之上ハ、とかく私ニハからひかたく候、堅大堂宮^塔ノ御子ニハ無之候(同書七八頁。その他、『藤沢市史研究』五号所収の牧野素山「七条文書」、『長楽寺千年』所収『遊行歴代上人肖像彫刻並びに七条文書』同寺、一九八二年、及び京都国立博物館図録『特別陳列 旧七条道場金光寺開創七〇〇年記念 長楽寺の名宝』二〇〇〇年、等にも写真と釈文掲載)と明言している。元和九年三月十二日、充所は金光寺第廿代持阿弥陀仏である。よつて「以故自爾賜御門跡之號」との記述も信用し難い。

第十五では

○性達肥前藤津郡八本木村原山知恩寺開山 弟子有竜聖・智心号一遍 正応三年八月二十三日化 (中略) 智心下有一阿・真教号他阿世称遊行上人 洛七条金光寺 相州藤沢無量寺開山、元応元年正月二十八日化

真観号淨阿、居洛東祇陀林寺朝廷賜金蓮寺 号歴応四年六月二日化 秘四条派時宗 作阿名俊明、洛金光寺 開祖 世称市屋派 心阿伊予奥谷実厳寺 開祖世称奥谷派 五人、真教下有他阿号中他阿弥陀 加賀井我入道 阿下

又有他阿号後阿弥陀 保野入道 後陀阿下有内阿相州当麻無量光寺 開祖 世称当麻派 解阿常州海老島新善光寺 開祖 世称解意派 王阿京五条新善光寺、世称御影堂開祖 沢阿・四人、沢阿

下有国阿名随心、号真空、文和四年発心通世、居洛東靈山正法寺等 国阿下有宣阿居洛東長楽寺 光英、英下有弥阿号榮尊、洛六条歡喜光寺開祖、世称六条派 (中略)

〔真宗史料集成〕 八、五八一頁)

とある。

両者共に一向系の派名はなく、それぞれどこか、浄土法系にも一向は出てこない。所謂「時宗十二派」中、「遊行派」との明示はないものの、前者には靈山国阿系を除く六派、後者には派名六と派名の付されないのが二ある。

後者で「沢阿」とあるのは託何であろうが、「相州藤沢無量寺」は当麻無量光寺、「祇陀林寺」は祇陀林寺、両者共に出る「奥谷実」(『新編真宗全書』でも「實」) 嚴寺」は宝嚴寺、である。真教は法諱で表記されるが、三代智得・四代吞海はそれぞれ「中他阿弥陀仏」(出身は加賀堅田だが加賀井我入道は不明)・「後阿弥陀仏」(続く記述に「後陀阿」とあるので後他「陀」阿弥陀仏か)と書かれる。国阿は念入りに発心遁世の年まで明記されているが文和四年(正平十年(一三五五))だと四十二歳であり、伝記等では託何入門を貞和三年(正平二年(一三四七))とする(国阿については後述)。

この中で、明らかに誤謬と思われるのが、六条派に関する記述である。按ずるに時宗教団に「弥阿」は多数存在し、更に歡喜光寺は弥阿を世襲する。金井清光『一遍と時衆教団』に「敦賀来迎寺藏の縁起によれば、国阿の直弟其阿榮尊が永徳二年北国化導のため来錫して開いた。かれは新田義貞の弟脇屋義助の嫡男で」とあり、榮尊が其阿となる前に弥阿(云わば因位の阿号)だった可能性があり、それと混同したのであろう。

その金井『一遍と時衆教団』も翻刻し引用しているが、時宗十二派のことに、はじめて記録した元禄十年(二六九七)江戸浅草日輪寺吞了(のちの遊行四十八代賦国)の『時宗要略譜』には次のように書かれている。

宗義立派之事

惣而時宗有十二派一々下誌之

他阿上人〔原文割注〕一遍上人正伝付法弟子、遊行二祖也。是言遊行派」

一向上人〔原文割注〕一遍上人弟子住江州番場蓮花寺建一向派」

心阿上人〔原文割注〕一遍上人弟子住子州奥谷宝嚴寺建奥谷流中古帰遊行派」

内阿上人〔原文割注〕遊行二祖上人之弟子住相州当麻無量光寺建当麻派」

浄阿上人〔原文割注〕遊行二祖上人之弟子住京四条之道場金光寺建四条派」

弥阿上人〔(原文割注) 遊行二祖上人之弟子住京六条之道場歡喜光寺建六条派今時歸遊行派〕

解阿上人〔(原文割注) 遊行二祖上人之弟子住常州海老島新善光寺建解意派〕

国阿上人〔(原文割注) 遊行十一代上人之弟子、京東山正法寺建靈山派〕

雙林寺〔(原文割注) 国阿上人初住之所在京東山国阿派建一本寺〕

金光寺〔(原文割注) 在京五条寺町市屋道場云始天台宗也一遍上人時歸依時宗其後立市屋派〕

仏光寺〔(原文割注) 在羽州天童一向上人入寂地建天童派今時歸江州蓮花寺之末寺〕

御影堂〔(原文割注) 一遍上人守御影沙弥在京五条曰御影堂派〕

上件何働我意建立一派称一本寺遊行一派之外相残十一末派多与尼衆同居故号破戒時衆遊行座下避参会者也

(時宗開宗七百年記念宗典編集委員会「編」『定本時宗宗典』下卷、山喜房仏書林、一九七九年、二三三頁)

これと類似したものが『古事類苑』宗教部十四「佛教十四 時宗 流派」にある。

〔二遍流義十二派略記〕遊行流義

一遍上人、正傳附法二祖眞教上人、是云遊行派、

一向流義

一遍上人弟子、一向上人、住江州番場蓮華寺、建一向派、

奥谷流義

一遍上人弟子、心阿彌、住豫州奥谷寶嚴寺、建奥谷流、中古歸遊行流義

當麻流義

二祖眞教上人弟子内阿、住相州當麻無量光寺、建當麻流、

四條流義

二祖眞教上人弟子淨阿、住京都四條金蓮寺、建四條流、
解意流義

二祖眞教上人弟子解阿、住常州海老島新善光寺、建解意流、
六條流義

二祖眞教上人弟子彌阿、住京都六條勸喜光寺、建六條流、
靈山流義

遊行十一代上人弟子國阿、住京都東山正法寺、建靈山派、
國阿流義

國阿上人、初住之處、在京都東山、號雙林寺、建國阿流一本寺、
市屋流義

在京都五條、云市屋道場、寺號云金光寺、元天台宗也、歸一遍、後建市屋流、
天童流義

羽州天童佛向寺、一向上人示寂之寺、建天童流、今時屬江州蓮華寺末寺、
御影堂流義

一遍上人影像守沙彌、在京都五條、是云御影堂流

〔諸宗祖師略傳〕時宗

市屋派作阿上人一遍ノ弟子、本山西
京市屋道場金光寺
御影堂派王阿上人一遍弟子、本山西京
五條御影堂新善光寺

両者はほぼ同じだが、特に後者の記述では「流」と「派」を弁別し、「遊行」「一向」「靈山」は「派」で、その他は「流」である。按ずるに、「流」は「派」の低位存在なのであろう。「奥谷」「當麻」「四條」「解意」「六條」「市屋」「御影堂」より上位に「遊行」は立ち、「國阿」より上に「靈山」、「天童」より高次に「一向」は在る、という認識であろう。勿論、一向は一遍の弟子とされ、勸^{マツ}「歡」喜光寺彌阿も眞教の弟子で、國阿（二二四〜一四〇五）は何故か遊行十一代自空（二二九〜一四二二）弟子とある。通例、國阿は遊行七代託何（二二八五〜一三五四）の弟子とされる。自空の方が國阿より若年であるが、國阿の法諱が真空であることも何か関連があるのだろうか。

尤も、拙稿「靈山時衆と眞宗教團」（『時衆文化』一二号、二〇〇五年、時衆文化研究会）で述べたが、佐々木篤祐『佛光寺史の研究』（本山佛光寺、一九七三年）の解説篇「第二章 了源上人とその門弟」が引く、佛光寺山内光齒院藏『了源上人御縁起』に、「洛外靈山の國阿が、了源の門弟であつた」とあり、その了源の別名は「空性」である。『望月仏教大辞典』の「國阿」項に、「又真空と號す」とあり、『仏教大事典』『日本仏教人名辞典』も、それを踏襲してか「真空」を別号としている（但し、何れも典拠は明示されていない）。この「真空」は了源の別名「空性」からの片諱とは考えられないだろうか。例えば了源の『交名帳』には約四十名の門弟名が列記されているが、その中で「空」が付く門弟は、まず直弟子に、空・專・空・覺・妙空・空・觀・願空・能空の六名、孫弟子に、空・念（空・覺弟子）・了空（妙空弟子）の二名、合計八名いる（宮崎圓遵「佛光寺教團の發展に關する一考察」初出一九三三年、のち同著作集4『眞宗史の研究』上、思文閣出版、一九八六年）。約五分の一である。しかも法名中「空」の付く位置も上・下半々である。「眞空」が、了源弟子時代の初代國阿の法名であつた蓋然性は高いと考えられる。勿論、「空」号は法然門下の、特に西山義に多く見られる法名なので、その可能性も否定できないが。

おわりに

さて一体、『大谷本願寺通紀』の著者玄智は、『扶桑二十一本寺略伝』（扶桑伽藍紀要）を除けば、どこから時宗の情報を入手したのであろうか。法然門流の著作も挙げられているが、当然、先の『時宗要略譜』や（一）遍流義十二派略記（諸宗祖師略傳）等も参照したのであろう。但し独自の情報もあるので、住持していた西六条慶証寺近隣の時宗寺院との交流もあつたものと考えられる。皮肉なことに、六条道場は四条に移っており、しかも六条派の記述には誤りがある。

何れにせよ、時宗以外の余宗についても、記述を精査する必要があるだろう。

以上、本稿は、『大谷本願寺通紀』が広く近世仏教界を俯瞰する書物である事を、時宗の側面から論証したものである。

注

(1) ただ近年では大塚紀弘『中世禅律仏教論』（山川出版社（山川歴史モノグラフ^⑧）、二〇〇九年）所収「中世仏教における「宗」と三字」の1「中世仏教における「宗」」の「付表 前近代の文献に見える「宗」」中に、元文4年（1739）の『大谷本願寺通紀』14「元文四年寺社府分宗簿」には（番号がずれているが）十七宗中に「時宗」とある事を挙げている。

(2) 「時宗十二派」について記す代表的な著作に、

大橋俊雄『時宗の成立と展開』吉川弘文館、一九七三年

金井清光『一遍と時衆教団』角川書店、一九七五年

小野澤眞『中世時衆史の研究』八木書店、二〇二二年
などがある。

(国府台女子学院高等部教諭)

